

## 近代八重山諸島における改良農具の変遷と台湾との交流

千葉商科大学 朽木 量

筆者は近年、石垣島（特に名蔵地区）での陸域開発の歴史と地点景観史の復元を研究している。その中で当該地域における開発には、農具の変遷が重要な意味を持つことが分かってきた。名蔵には、近世から現代に至るまで複数回の入植が行われてきた。徳島からの中川虎之助らの移民と 1932 年 7 月頃からの台湾からの入植者が代表的なものである。とりわけ、台湾からの百名にも及ぶ入植は農具・農法に大きな変化をもたらし、名蔵地区だけでなく、石垣島全体の農業にも影響した。また、ほぼ同時期に石垣島では改良農具の競犁会があり、島に改良農具が根付いていった。

一方、石垣島における民具研究は、木鋤（キーパイ）から金鋤（カニパイ）への変化についての研究が中心であり、こうした近代における改良農具の普及と変遷についてはあまり論じられてこなかった。こうした背景をふまえて、本研究では石垣島における改良農具の普及と、当時使用されていた台湾からの入植者が持ち込んだ農具類の特定、戦前期の日本と台湾の農具の交流について研究を行っている。今回の研究会では、上述したこれまでの研究成果を報告した。